

特定の他者を脅威ターゲットとする脅威アピール説得

— 知人への脅威を喚起する説得の効果と生起機制 —

Persuasion by Using Specific Other Threat Target

— The Effects and Mechanism of Persuasion

Arousing Threat toward Acquaintance —

戸塚 唯氏

Tadashi TOZUKA

本研究は、脅威アピール説得に関して実験的研究を行った戸塚(2017)の追試である。戸塚(2017)で用いられた説得メッセージを改良した上で、脅威ターゲットが特定の他者である場合の脅威アピール説得に関する生起機制について検討を行った。実験は集合的に行い、参加者は大学生65名(男性39名、女性26名)であった。まず参加者に説得メッセージを読ませ、その後質問紙に回答させた。質問紙では説得メッセージで勧告した対処行動の実行意図と深刻さ認知をはじめとした諸認知を測定した。得られたデータについて重回帰分析を行ったところ、対処行動意図に対する深刻さ認知、二次被害の深刻さ認知、義務認知、コスト認知の影響力が確認された。

問題

はじめに

本研究は、脅威アピール説得に関して実験的研究を行った戸塚(2017)の追試である。脅威アピール説得とは、「送り手がある特定の説得話題について受け手を説得しようとするときに、脅威の危険性を強調して受け手を脅かすことによって、その脅威に対処するための特定の対処行動の勧告に対する受け手の受容を促進させよう」と意図されたコミュニケーション(深田, 1988)であり、説得メッセージで描写される脅威ターゲット(脅威の対象)の種類によっていくつかのタイプに分けられる。例えば、脅威ターゲットが説得の受け手自身であるタイプ(①)や、受け手の重要な他者であるタイプ(②)、受け手と受け手の重要な他者であるタイプ(③)、受け手を含む

不特定多数であるタイプ(④)などである。脅威アピール研究領域のほとんどの先行研究は①のタイプを扱ってきており、その生起機制や説得効果については多くの研究がある(Janis & Feshback, 1953; Rogers, 1975; 木村堅一, 2000)。②や③についても数は少ないものの、近年研究がなされている(戸塚, 2002; 戸塚・深田・木村, 2002)。一方、戸塚(2017)は脅威ターゲットが受け手にとってまったくの他者であるタイプ(⑤)を取り上げ、その生起機制を研究した。脅威アピール説得において、対処行動を実行するのは説得の受け手であるので、脅威ターゲットが受け手自身である場合(①)やその重要な他者を含む場合(②、③、④)には大きな説得効果が得られることが容易に予想できるが、脅威ターゲットが全くの他者である場合、その生起機制や説得効果の大きさについては、Shelton & Rogers(1981)を除いて研究が行われていない。しかしながら近年は、フードバンクへの寄付、骨髄バンクへの登録、難民への支援などに関する⑤のタイプの説得が社会で増加しているように思われ、効果的な説得メッセージを作るために、同タイプの説得

連絡先：戸塚唯氏 ttozuka@cis.ac.jp

千葉科学大学教職・学芸員センター

Center for Teacher Training and Museum Education

(2019年9月24日受付, 2019年12月11日受理)

の生起機制の解明が重要となっている。しかしながら唯一の先行研究である Shelton & Rogers (1981) は、深刻さ、共感性、対処行動の効果性という、3つの影響要因を検討しているにすぎず、その他の要因が影響力を持っている可能性を否定できなかった。これを受けて戸塚 (2017) は、このタイプの説得に効果を与えうる多くの変数を独立変数として採用し、このタイプの説得の生起機制について研究を行った。

戸塚 (2017) の概略

まず戸塚 (2017) は、「脅威ターゲットが他者である説得」は2つのタイプに分けることができると指摘した。すなわち脅威ターゲットが「特定の他者」であるタイプと、「不特定の他者」であるタイプであり、戸塚 (2017) はそれぞれのタイプの説得効果に及ぼす影響要因も異なるだろうと予測している。例えば、「あなたと同じクラスにいる発達障害のA君へのいじめをやめましょう」という説得は脅威ターゲットが「特定の他者」の場合に当たるが、このような場合には30人程度のクラスの1人である自分が差別をやめればその分差別は確実に減るため、ある程度効果性の認知が影響力を持つと考えられる。一方、「世の中の発達障害を持つ人へのいじめをやめましょう」という説得は脅威ターゲットが「不特定の他者」の場合に当たるが、日本だけを考えても1億人以上いる中の自分一人が差別をやめても、ほとんど差別は減らないはずであり、効果性の認知が影響力を持つとは考えづらい。このように効果性だけを取り上げても「特定の他者」と「不特定の他者」の場合で影響力が大きく異なることが予想されたが、それ以外にも「特定の他者」の場合には第三者(例えば他の級友)の動向や義務感等が、「不特定の他者」の場合には対処行動を行う意義等が強く作用することが予想された。そのため戸塚 (2017) はこの2つのタイプの生起機制を別々に検討した。

「特定の他者」に関する実験の概要は次のようなものであった。まず被調査者に「あなた自身が中学2年生であるつもりになって下の文章を読んでください。あなたは中学2年生で学級委員長です」という教示を行い、その上で「被調査者が所属するクラスで発達障害の生徒がいじめられており、担任から当の生徒を援助するよう依頼される場面に関する文章」を読ませた(場面想定法)。その後、質問紙で対処行動意図(勧告された対処行動を実行する意図)および、迷惑認知、深刻さ認知、二次被害の確率認知、二次被害の深刻さ認知、内的規範認知、義務認知、実行者割合認知、支持認知、効果性認知、コスト認知を測定した。これらの10認知を規定因の候補としたのは、防護動機理論(Rogers, 1975, 1983)および集会的防護動機理論(深田・戸塚, 2001; 戸塚, 2002)の枠組みからの推測である。両理論は脅威アピール説得研究

の生起機制と効果を説明する理論であり、説得メッセージを受領した説得の受け手が持つ諸認知が対処行動意図に影響を及ぼすと予測している。戸塚 (2017) は両理論の規定因をもとに特定の他者を脅威ターゲットとする説得における対処行動意図の規定因の候補を案出した。

対処行動意図を従属変数、その他の認知を独立変数とした重回帰分析を行ったところ、支持認知($\beta = .41$; 標準化係数、以下同じ)とコスト認知($\beta = -.30$)のみが有意であり($R^2 = .32$)、その他の独立変数は有意でなかった。支持認知とコスト認知が対処行動意図に影響を与えていることが明らかになったが、影響を与える要因が2つしか明らかにできず、それらによる対処行動意図の予測力も低かった。また脅威アピール説得の主要成分である深刻さ認知の影響も確認できなかった。

次に、「不特定の他者」に関する研究の概要は次のようなものであった。まず被調査者に「下の文章はある中学校で女性カウンセラーが生徒に向けて話した講演の内容です。まずこの文章を読んでください」という教示を行い、その上で「障害を持つ人たちは誤解されやすいので、いじめられているところをみたら、かばってあげて欲しい」という趣旨の心理カウンセラーの講演についての文章を読ませた。その後、質問紙で対処行動意図、迷惑認知、深刻さ認知、二次被害の確率認知、二次被害の深刻さ認知、内的規範認知、義務認知、実行者割合認知、支持認知、意義認知、コスト認知を測定した。そして、対処行動意図を従属変数、その他の認知を独立変数とした重回帰分析を行ったところ、迷惑認知($\beta = -.43$)、義務認知($\beta = .30$)とコスト認知($\beta = -.33$)、意義認知($\beta = .22$)のみが有意であり($R^2 = .78$)、その他の独立変数は有意でなかった。

「特定の他者」および「不特定の他者」を扱った研究に関して、上述のような結果が得られたわけだが、どちらの研究においても脅威アピール研究の主要成分である深刻さ認知の影響が見られなかった。この結果は、「脅威ターゲットが他者である説得においては、脅威ターゲットの被害の大きさに関する説得の受け手の認知は説得効果を高めない」ことを示唆しているように思える。脅威が向いているのは受け手自身ではなく、受け手にとっての重要な他者でもない場合、他者が深刻な被害を受けていても受け手にとっては「ひとごと」で、深刻さ認知は説得効果に影響力を持たないと考えることもできる。しかしながら不特定の他者を脅威ターゲットとする説得を扱った先行研究である Shelton & Rogers (1981) では、深刻さの主効果が見いだされており、脅威ターゲットが他者の場合でも被害が深刻であるほど説得効果が高まっていた(ただしこの研究の脅威ターゲットは人間ではなく自然動物のクジラであり、人間を脅威ターゲットとした説得で同じ結果が得られるかどうかは不明)。

このように深刻さ認知の影響についてはShelton & Rogers (1981)と戸塚 (2017) で得られた結果が異なっていた。また戸塚 (2017) の「特定の他者」に関する研究は対処行動意図に影響を持つ要因が2つしか見いだされず、 R^2 の値も低く十分に説得効果を予測できていなかった。これらの結果について戸塚 (2017) は、研究で使用した説得メッセージの分量の少なさ原因であった可能性を指摘している。当該の研究で使用された説得メッセージは730字程度でしかなかった(補助資料1)。この研究では場面想定法を使用していたが、メッセージがこの分量では、参加者は当の場面を想像することが困難であった可能性があり、そのための対処行動意図に影響を与える諸認知が十分に形成されなかった可能性がある。戸塚 (2017) は、より臨場感豊かな説得メッセージを使用した再検討が必要であると述べている。

本研究の目的

本研究の目的は、戸塚 (2017) の説得メッセージを改善した上で「特定の他者」を脅威ターゲットとする説得効果に関する生起機制を再検討することである。特に受け手自身を脅威ターゲットとする脅威アピール説得等で大きな影響力が見いだされてきた深刻さ認知の影響が、特定の他者を脅威ターゲットとする脅威アピール説得で見られるのかどうかについて注目する。できるだけ戸塚 (2017) に近づけるため、実験参加者は同じ大学、同じ講義に参加している大学生から募った。

なお本研究で使用する説得メッセージの改善点は戸塚 (2017) を改良したものであるが、その改良点は次の通りである。①説得メッセージの分量を増加した(730字から1550字へ)、②戸塚 (2017) では簡単にしか描写されていなかったクラスメイトとのトラブルについての描写を追加した。③脅威ターゲットが持っている発達障害について参加者がより容易に理解できるよう描写を変更した。④脅威ターゲットが直面している脅威をより具体的に描写した。

方法

実験の概要と参加者

実験は2018年12月に大学の講義時間を利用して集団実施した。まず説得メッセージと質問紙からなる冊子が無作為に配布した。質問紙のタイトルは「対人トラブルに関する意識調査」であり、口頭ならびに質問紙の表紙の文章で教示を行った。なおその際には、①この実験への参加が個人の自由であること、②不参加であってもペナルティはないこと、③回答したくない項目には答えなくてよいことについて説明を行った。参加者は、千葉県内の日本人大学生68名であった。このデータから、回答に欠損があった者3名のデータを削除し、分析対象者

は65名(男性39名、女性26名)、平均年齢は18.83歳($SD = 2.10$)であった。

説得メッセージ

参加者に「あなた自身が中学2年生であるつもりで下の文章を読んでください」と教示した上で説得メッセージを読ませた(場面想定法)。説得メッセージは戸塚(2017)を改良したものであり、まず発達障害を持つA君が参加者を含むクラスメイトとトラブルになっている状況が説明され、その後担任が参加者にA君を援助して欲しいと依頼するものであった(約1550字、補助資料2を参照)。

測定項目

測定項目はすべて戸塚 (2017) と同じものと使用した。**迷惑認知** 「これまでのA君の行動(授業中の立ち歩き、かっとなりやすい等)を、クラスメイトであるあなたは迷惑に思っていますか?」、「これまでのA君の行動(授業中の立ち歩き、かっとなりやすい等)を、クラスメイトであるあなたは腹立たしく思っていますか?」の2項目で測定した(とてもそう思う4点、全くそう思わない1点)。2項目の α 係数は.79であり、この2項目の平均値を迷惑認知得点とした。

深刻さ認知 「クラスメイトから冷たくされて、A君はとてもつらいだろうと思いますか?」、「A君へのいじめは深刻だと思いますか?」の2項目で測定した(とてもそう思う4点、全くそう思わない1点)。2項目の α 係数は.77であり、この2項目の平均値を深刻さ認知得点とした。**二次被害の確率認知** 「A君をかばうことで、今度はあなたがいじめの対象となる可能性は大きいと思いますか?」、「A君にやさしくすると、今度はあなたが陰口を言われる可能性は大きいと思いますか?」の2項目で測定した(とてもそう思う4点、全くそう思わない1点)。2項目の α 係数は.89であり、この2項目の平均値を二次被害の確率認知得点とした。

二次被害の深刻さ認知 「A君をかばったことで、今度はあなたがいじめられるとしたら、それはとても深刻なことだと思いますか?」、「A君に優しくすることによって、今度はあなたが陰口を言われるとしたら、それはとてもつらいことだと思いますか?」の2項目で測定した(とてもそう思う4点、全くそう思わない1点)。2項目の α 係数は.72であり、この2項目の平均値を二次被害の深刻さ認知得点とした。

内的規範認知 「A君を助けることは人間として正しい行為だと思いますか?」、「A君に優しくすることは道徳的に正しいことだと思いますか?」の2項目で測定した(とてもそう思う4点、全くそう思わない1点)。2項目の α 係数は.76であり、この2項目の平均値を内的規範

認知得点とした。

義務認知 「A君を援助することはあなたの義務だと思いますか?」、「A君を援助することは人として当然の義務だと思いますか?」の2項目で測定した(とてもそう思う4点、全くそう思わない1点)。2項目の α 係数は.74であり、この2項目の平均値を義務認知得点とした。

実行者割合認知 「多くのクラスメイトがA君を援助していると思いますか?」、「多くのクラスメイトがA君に優しく接していると思いますか?」の2項目で測定した(とてもそう思う4点、全くそう思わない1点)。2項目の α 係数は.71であり、この2項目の平均値を実行者割合認知得点とした。

支持認知 「あなたがA君を援助することを、多くのクラスメイトが支持すると思いますか?」、「あなたがA君にやさしくすることを、多くのクラスメイトが応援すると思いますか?」の2項目で測定した(とてもそう思う4点、全くそう思わない1点)。2項目の α 係数は.77であり、この2項目の平均値を支持認知得点とした。

効果性認知 「あなたがA君を援助することによって、A君のつらさは軽減されると思いますか?」、「あなたが

A君にやさしく接することによって、A君へのいじめは少なくなると思いますか?」の2項目で測定した(とてもそう思う4点、全くそう思わない1点)。2項目の α 係数は0.60であり、この2項目の平均値を効果性認知得点とした。

コスト認知 「A君を援助することは面倒だと思いますか?」の1項目で測定した(とてもそう思う4点、全くそう思わない1点)。

対処行動意図 「あなたはA君を援助していくつもりがありますか?」、「あなたはA君に優しく接してあげるつもりがありますか?」の2項目で測定した(とてもそう思う4点、全くそう思わない1点)。2項目の α 係数は.89であり、この2項目の平均値を対処行動意図得点とした。

人口統計学的変数 参加者の性別、年齢を尋ねた。

結果

各変数の平均と各変数間の相関

特定条件の各変数の平均と標準偏差を表1に、各変数間の相関係数を表2に示す。

表1 各変数の平均と標準偏差

	迷惑認知	深刻さ認知	二次被害の 確率認知	二次被害の 深刻さ認知	内的規範	義務認知
<i>M</i>	3.03	3.35	3.32	2.98	3.54	2.68
<i>SD</i>	(0.72)	(0.68)	(0.74)	(0.82)	(0.59)	(0.81)
	実行者割合 認知	支持認知	効果性認知	コスト認知	対処行動 意図	
<i>M</i>	1.65	1.98	2.58	2.29	3.02	
<i>SD</i>	(0.54)	(0.55)	(0.69)	(0.91)	(0.62)	

表2 変数間の相関マトリックス

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1.迷惑認知										
2.深刻さ認知	-.13									
3.二次被害の確率認知	.16	.13								
4.二次被害の深刻さ認知	.32**	-.05	.41**							
5.内的規範認知	-.01	.56**	-.04	-.08						
6.義務認知	-.10	.55**	-.08	-.14	.55**					
7.実行者割合認知	-.08	-.06	-.35**	-.24	-.03	.17				
8.支持認知	-.19	.21	-.40**	-.12	.22	.34**	.42**			
9.効果性認知	-.19	.35**	-.28*	-.23	.43**	.41**	.27*	.61**		
10.コスト認知	.26*	-.24	.33**	.37**	-.31*	-.46**	-.23	-.33**	-.35**	
11.対処行動意図	-.18	.57**	-.28*	-.41**	.55**	.64**	.10	.32**	.50**	-.63**

注)** $p < .01$, * $p < .05$

対処行動意図に及ぼす各変数の効果

測定した10認知を説明変数、対処行動意図を従属変数とするステップワイズ式の重回帰分析を行った(表3)。

その結果、説明変数として有意だったのは、義務認知、二次被害の深刻さ認知の4つであり、 R^2 は.67であった。その他の説明変数は有意でなかった。この結果は、潜在的援助者が自分に相手を援助する義務があると思うほど、また当の対処行動が容易に行えると思うほど、また相手が深刻な脅威に直面していると思うほど、また自分に二次的な被害が生じないと思うほど、対処行動意図が高まることを示している。

表3 特定条件における重回帰分析の結果

義務認知	.27 **
コスト認知	-.34
深刻さ認知	.32
二次被害の深刻さ認知	-.23 *
R^2	.67 **
Adj- R^2	.65 **

注1)** $p < .01$, * $p < .05$

注2)表中の数値は標準化係数

考察

対処行動意図の規定因

本研究の目的は、戸塚(2017)の説得メッセージを改善した上で「特定の他者」を脅威ターゲットとする説得効果の生起機制を再検討することであった。分析の結果、義務認知、コスト認知、深刻さ認知、二次被害の深刻さ認知の影響が見いだされた。戸塚(2017)と一部の影響要因が異なったのは、説得メッセージを大きく変更したことで参加者のいくつかの認知に変化が生じたためだと考えられる。

まず深刻さ認知についてであるが、脅威ターゲットが他者である場合には受け手は被害を受けないわけであるから、深刻さ認知が対処行動意図に対して影響力を持たない可能性も考えられたが、本研究の分析では影響力が確認された。この結果はShelton & Rogers(1981)のそれと調和的である。これらの事実から、脅威ターゲットが他者である場合でも深刻さ認知は説得効果を高める可能性が示された。ただし戸塚(2017)では影響力が見られておらず、説得メッセージの構成によっては深刻さ認知が影響力を持たない場合もあるのかもしれない。

今回の分析では二次被害の深刻さ認知の影響も確認された。現実場面では、他者を援助することが援助者のリ

スクになるような事態もしばしば見受けられ、潜在的援助者はそのようなリスクを考慮した上で援助するかどうか(説得を受諾するかどうか)を決定すると考えられる。このような予測から戸塚(2017)は二次被害の深刻さ認知の影響を検討したが、その影響力は見いだされなかった。一方、本研究でその影響が見られたという事実は、説得メッセージの構成によっては(つまり説得の受け手に対処行動を実行した場合に新たなリスクが生じるということ強く意識させたような場合には)、二次被害の深刻さ認知も影響力を持つ可能性があることを示している。

次に義務認知であるが、この認知が影響力を持ったのは、説得メッセージにおいて「(発達障害を持つ子に対して)できるだけ優しくしてあげなさい」と親から諭された描写があったことと、先生が発達障害の症状について比較的詳しく説明する描写があったことが影響しているのだろうと考える。このような描写によって参加者の義務認知が刺激されたものとみられる。コスト認知の影響は、戸塚(2017)と同様であった。脅威ターゲットが自分でも自分にとっての重要な他者でもないような場合、面倒くさいという心理的負担感が強く働くことが示されたと言える。

一方、支持認知の β 係数は有意ではなかった。戸塚(2017)では支持認知はコスト認知よりも大きな影響力を持っていたが、本研究ではそのような影響力は確認できなかった。ただし、本研究における支持認知は、義務認知とコスト認知、対処行動意図との間に中程度の相関があり、支持認知が義務認知やコスト認知を媒介して対処行動意図に影響を与えていた可能性も考えられる。

本研究のまとめと今後の課題

本研究では戸塚(2017)で見いだされなかった深刻さ認知の影響が確認された。この事実は、たとえ脅威ターゲットが特定の他者である脅威アピール説得においても、被害者の被害の深刻さをアピールすることが説得効果を高める上で有効であることを示している。基本的に、このようなタイプの説得も脅威アピール説得の枠組みを利用して説得効果を予測できるといえる。ただし、今回初めて二次被害の深刻さ認知の影響も見いだされた。このような影響要因は他のタイプの脅威アピール説得を扱った先行研究では見いだされておらず、脅威ターゲットが特定の他者である脅威アピール説得に特有の影響要因が存在するといえる。

今後の課題としては次のようなものが挙げられる。1つ目は「不特定の他者」を脅威ターゲットとした場合の影響要因の再検討である。今回の「特定の他者」の研究においては、戸塚(2017)で確認できなかった深刻さ認知、二次被害の深刻さ認知の影響を確認することができた。「不特定の他者」についても説得メッセージを改良

したうえで、再度検討してみる必要がある。2つ目は他の説得話題を使った再検討である。本研究ではいじめの話題を用いたが、例えばLGBTへの差別低減や、フードバンクへの寄付の呼びかけの話題、難民支援の話題等を使用して、本研究と類似する結果が出るかどうかを確認する必要がある。

いじめを低減するための説得をはじめとして、他者を脅威ターゲットとする説得は数多く存在する。これらの説得はおおむね社会的弱者の援助・救済を目指したものであり、共生社会の実現という点から考えても重要である。しかしながらこの領域に関する知見はまだ十分ではなく、今後の一層の研究が望まれる。

引用文献

- 深田博己 (1988). 説得と態度変容 - 恐怖喚起コミュニケーション研究 - 北大路書房
- 深田博己・戸塚唯氏 (2001). 環境配慮的行動意図を改善する説得技法の開発 (未公刊)
- Janis, I. L., & Feshback, S. (1953). Effects of fear-arousing communications. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 48, 78-92.
- 木村堅一 (2000) 説得に及ぼす脅威アピールの効果 - 防護動機理論からの検討 - 実験社会心理学研究, 39, 135 - 149.
- Rogers, R. W. (1975). A protection motivation theory of fear appeals and attitude change. *Journal of Psychology*, 91, 93-114.
- Rogers, R. W. (1983). Cognitive and physiological processes in fear appeals and attitude change : A revised theory of protection motivation. In J. T. Cacioppo & R. E. Petty (Eds.), *Social Psychophysiology*. New York: Guilford Press. Pp153-176.
- Shelton, M. L., & Rogers, R. W. (1981). Fear-arousing and empathy-arousing appeals to help : The pathos of persuasion. *Journal of Applied Social Psychology*, 11, 366-378.
- 戸塚唯氏 (2002). 環境問題に対する集会的対処行動意図の規定因 広島大学大学院教育学研究科紀要 第3部 (教育人間科学関連領域), 51, 229-238.
- 戸塚唯氏 (2017). 発達障害を持つ特定・不特定の対象への援助を促進する要因 - 特定・不特定の他者を脅威ターゲットとする説得の効果 - 国際教育研究所紀要, 27, 39-55.
- 戸塚唯氏・深田博己・木村堅一 (2002). 受け手自身あるいは家族を脅威ターゲットとする脅威アピール説得 実験社会心理学研究, 42, 83-90.

補助資料1

戸塚 (2017) の説得メッセージ

1. あなた自身が中学2年生であるつもりになって下の文章を読んでください。

あなたは中学2年生で学級委員長です。あなたのクラスには、発達障害(注意欠如多動症)の生徒A君がいます。この障害は生まれつきのもので、「注意が持続しない」「頻繁(ひんぱん)に動き回ってしまう」「かっとなりやすい」という特徴があります。A君も授業中に立ち歩いてしまったり、先生に注意されてもずっとおしゃべりを続けたりしています。またささいなことでも怒り出すことが多いので、多くのクラスメイトはA君と関わらないようにしたり、無視したりしています。一部のクラスメイトはA君のことを「クズ」「バカ」と言ったり、ときにはA君の持ち物を隠したりしているようです。もともとは陽気なA君でしたが、最近はこわばった表情をすることが多くなり、投げやりな言動が多くなってきています。A君をかばう人もいますが、今度はその人が「いい子ぶってる」「偽善者(ぎぜんしゃ)」と陰口(かげぐち)を言われるようになってしまいました。

あなたはA君へのいじめに参加していませんでしたが、授業中のA君の立ち歩きには不満を感じてあまり近づきたくないと思っていました。そんな時、あなたは担任の女性教諭に呼ばれ、次のように言われました。「クラスみんながA君を避けてるって話を聞いたわ。でもA君の障害は生まれつきのもので、彼自身に責任があるものではないの。確かにみんなには少し迷惑(めいわく)をかけてしまうことはあるんだけど、根はいい子なのよ。きつとつらい思いをしていると思う。せめて学級委員長のあなたはA君に優しくしてあげてくれない? ときどき話しかけてあげると喜ぶと思うの。あとA君が困っているときには助けてあげてほしい。そしてA君がみんなから責められているようなら、できればかばってあげて。」

補助資料2

本研究の説得メッセージ

1. あなた自身が中学2年生であるつもりになって下の文章を読んでください。

あなたは中学2年生で学級委員長です。あなたのクラスには、男子生徒のA君がいます。A君はときどき困った行動をすることがあります。例えば授業中、あまり先生の話聞かず、頻繁に隣の人に話しかけたり、消しゴムのかけらを友人に投げたりして遊んでいます。時には授業中であるにもかかわらず、立ち歩いて友達をからか

ったりしています。先生はA君にしばしば注意しますが、まったく聞き入れません。

またA君はかっとなりやすく、ささいなことでも怒り出すことがあるので、多くのクラスメイトはあまりA君と関わらないようにしているようです。この間は定規(じょうぎ)の貸し借りでB君とけんかになっていました。A君がB君の定規を返さないで、B君が「返せよ」と言ったらB君を突き飛ばしてしまいました。このときは先生が仲裁しましたが、A君ははっきりとは謝りませんでした。B君はA君の態度に納得がいかなかったようです。またCさんとトラブルになったこともあります。掃除の時間、A君がまじめに掃除せずにふざけてばかりいたので、Cさんが「まじめにやって!」といったところ、A君は「うるせーよ!」と強く机をけとばし、ほうきを壁にたたきつけてその場からいなくなってしまうました。それ以降、CさんはA君と口をきいていません。

このようなことが続くので多くのクラスメイトはA君に不満を持つようになっていきました。一部のクラスメイトは陰でA君のことを「バカ」「ゴミ」と言ったり、無視したり、あからさまにさげすんだりしています。ときにはA君の持ち物を隠して、それを探すA君をこっそり笑ったりもしているようです。スマートフォンでSNSをやっている一部のクラスメイトは、SNSでもAくんへの不満を話題にしていると聞きました。

もともとは陽気なA君でしたが、最近はこわばった表情をすることが多くなり、投げやりな言動が多くなってきました。口数も減ってききましたし、クラスメイトとのトラブルも増えています。DさんやE君など、A君をかばう人もいましたが、今度はその人たちが「いい子ぶってる」「偽善者(ぎぜんしゃ)」などと陰口(かげぐち)を言われるようになってしまい、次第にA君から離れていきました。最近のA君は一人でいることが多いようです。

あなたはA君の悪口を言ったり、無視したりすることはありませんでしたが、A君のことをちょっと怖いと思っていましたし、授業中のA君の立ち歩きやおしゃべりには不満を感じていました。A君のことを両親に話してみたところ、「もしかしたらA君は何かの発達障害を持っているのかもしれないね。発達障害っていうのは、生まれつきの障害で、注意が持続しないと感情的になりやすいという特徴があるんだよ。難しいところもあるだろうけどできるだけ優しくしてあげなさい」と言われました。ただそう言われたものの、あなたはA君と親しくするのは気が進まず、ある程度の距離をおいて過ごしていました。

しばらくして学級委員長のあなたは担任の女性教諭に呼ばれ、次のように言われました。「クラスみんながA君を避けてるって話を聞いたわ。A君は確かに感情的になりやすいところはあるんだけど、そういう傾向は生

まれつきのもので、彼自身に責任があるものではないの。確かにみんなには少し迷惑（めいわく）をかけてしまうときはあるんだけど、根はいい子なのよ。みんなとどう接していいのかよくわからないだけなの。このままだと本当に孤立してしまいそうだし、学級委員長のあなたが率先してA君に係ってあげてくれない？ ときどき話しかけてあげると喜ぶと思うし、困っているときには助けてあげてほしいの。そしてA君がみんなと打ち解けられるように助けてあげてくれない？ できるだけいいから。私の方でもクラスみんなで話し合う機会を作るつもり。」